

原村の地域おこし協力隊が発行するかわらばんのことで、原村で暮らす、おもしろくて素敵なひとを紹介します。



ぜひ原中学校にブドウ畑を見にいらしてください！

「原村学 ブドウの栽培・醸造講師」

小林 峰一さん(56)

原村出身。高校卒業後は東京へ出るが35歳の時に自然豊かな場所で暮らしたいと思いUターン。家業の花卉農家を継ぐ傍ら、環境や人に負担のない有機栽培を始める。現在は原村でワイン用ブドウの栽培を行っており、原中学校で行われている学習「原村学」の講師として中学生にワイン用ブドウ栽培の指導をしている。

ワインで原村を元気に！

温かな眼差しで明るい村の未来を見つめる

原村では果樹の栽培が難しいように思われているが、世界的なワインの産地と積算温度を比較すると十分に栽培が可能だということが分かり、50歳のときに原村にワイナリーを作ろうと考えた。ワイン用ブドウの栽培を始めて今年で7年目となる。

村の良さを知り自分たちが育った村を誇りに思っているという想いを込めた「原村学」という学習が昨年度から原中学校で始まった。その授業の一環として、自分たちで育てたブドウでワインを醸造し20歳のお祝いに乾杯しよう！という計画があり、その講師として峰一さんが招かれた。

子供達にはかなり専門的なことも教えているそう。「この授業でワインに興味を持ち、外で知識を学んだ子供たちがいずれ原村に戻ってきてくれたら嬉しいです。」と、可能性の溢れる元気な村の将来を笑顔で語ってくれた。

自然が大好きな峰一さんは、自然を守る活動が生活の一部となっている。温暖化の影響で特産であるセロリをはじめとする高原野菜の栽培が難しくなった

とき、遊休農地が増え、その土地がソーラーパネルに変わってしまうことを懸念している。「ワイン用ブドウの栽培とワイナリーの建設をすることで、そんな問題から原村を守れるかもしれないと思っただけです。だから、この計画はとても大切なことと考えています。」と話してくれた。

原村学で原村の子供たちと触れ合う中で、自然の有り難さや厳しさを肌で感じて育った彼らの、逞しさや感性の豊かさに感激したと語る峰一さん。「冬が寒すぎるとこの土地での暮らしは、知恵がないと生き抜けない。百姓とは、考えて知恵を身に着けた人のことなんですよね。そんなカッコいい大人たちと触れ合いながら育つ子供たちは、どんなに厳しい環境においても自分の中から何かを生み出し、力を発揮できる人間に育つのではないかと思います。」と話し、子供たちには、人と違うことを恐れず個性を磨いていってほしいと想いを語ってくれた。

自然や人に温かな眼差しを向け、自分には何が出来るだろうかと常に考え行動する峰一さん。温かさの中に厳しさを抱くその姿は原村そのものだと感じた。